

奈良教育大学における教師力向上の取り組み

—先端的な教職科目体系のモデル開発プロジェクトの1年目の成果と課題—

柴本枝美

(奈良教育大学先端的な教職科目体系のモデル開発プロジェクト)

赤沢早人

(奈良教育大学教育実践総合センター)

The trial to promote teacher competency in Nara University of Education

—The achievement and issues of Teachers competency project in the first year—

Emi SHIBAMOTO

(Teachers competency project, Nara University of Education)

Hayato AKAZAWA

(Center for Educational Research and Development, Nara University of Education)

要旨：平成22年度から始まった「先端的な教職科目体系のモデル開発プロジェクト」は、概算要求特別教育研究経費（高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実）による事業として採択されたものである。本稿では、本プロジェクトの概要について説明し、平成22年度の取り組みにおける成果と課題について整理した。平成22年度の成果としては、①プロジェクトの支援および学生の学びを支える場所としての教師力サポートオフィスの設置、②学生向けの「めあて」を提示するための方略（「教職ノート」「教師力100冊」「教職検定」）の準備、③Cuffetを深める指標として教職専門科目のルーブリックの検討、④教育実習スタートアップの実施があげられる。今後の課題としては、平成22年度に試行した中で見いだされたそれぞれの取り組みにおける課題をふまえ、改善していくことがあげられる。

キーワード：教師力 (teachers competency) 教職科目 (subjects for teaching profession)
教育実習 (teaching practice)

1. はじめに

教師に求められる資質能力とは何か、これまで様々な議論を経てきている。1997（平成9）年7月に公表された教育職員養成審議会の第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」では、子どもたちに生きる力を育てるため、教師に今後特に求められる資質能力として、大きく以下の三つがあげられている。それは、①地球的視野に立って行動するための資質能力、②変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力、③教員の職務から必然的に求められる資質能力、である。そして、すべての教師が一律にこれらの資質能力を身につけることは現実的ではないと述べられ、得意分野をもつ個性豊かな教員の必要性が強調されている。1998（平成10）年10月の第二次答申「修士課程を積極的に活用した教員養成の在り方について—現職教員の再教育の推進—」では、大学院における

教員養成について、1999（平成11）年12月の第三次答申「養成と採用・研修との連携の円滑化について」では、現職研修についての見解が述べられている。

2002（平成14）年2月に出された中央教育審議会「今後の教員免許制度の在り方について」、2006（平成18）年7月の「今後の教員養成・免許制度の在り方について」を経て、教育職員免許法が改正された。大きな変更点は、免許更新制、「教職実践演習」の導入である。そこに示された教師に求められる資質能力は、先に挙げた1997（平成9）年の答申に基づくものであり、優れた教師の条件として、2005（平成17）年の中央教育審議会の答申「新しい時代の義務教育を創造する」において示された要素が提示されている。それは、①教職に対する強い情熱、②教育の専門家としての確かな力量、③総合的な人間力、である。そのうえで、これらの資質能力を「確実に」身につけることの重要性が高まっていると述べられ、教員養成の在り方につ

いても提言がなされている。

教員養成の在り方については、大学の養成段階でどのような教育プログラムを構築すべきなのかについて、「今後の国立の教員養成系大学学部の在り方について一国立教員養成系大学学部の在り方に関する懇談会一」（「在り方懇談会」報告、2001年11月）以降、発展的な提言が行われてきている。「今後の教員養成・免許制度の在り方について」においても、「教職課程の質的水準の向上」の提起において、「モデルカリキュラムの開発研究」「教職指導の充実」「教員養成カリキュラム委員会の機能の充実・強化」が指摘されているところである¹⁾。

本学の教員養成課程においては、これまで<新任教師に求められる資質能力目標に基づく教員養成のためのカリキュラム・フレームワーク>（Nara University of Education Curriculum Framework for Expert Teachers:Nue Cuffet 以下、Cuffetと示す。）をもとに、七つの資質能力基準に基づく授業科目の構造化が全学的に試みられてきた。平成22年4月現在で、本学で提供している授業科目987科目のうち、約23.7%（課程共通科目など、一部科目を除いた数値）が、Cuffetとの紐付けを行っている。

このように、授業科目の構造化の試みは着実に進んでいるが、その一方で、本学のカリキュラムに関して、とりわけ次の二つの課題が明らかになった。

①教授内容が関連したり近接したりしている科目同士の内容的な関連性や系統性の検討が不十分である。

②Cuffetの七つの基準のそれぞれについて、内部的な系統性が明らかでない。

本学では、こうした課題に対応すべく、まず「教職

科目」の検討から着手することにした。平成21年2月に学内に立ち上げた検討グループでは、学内で展開している教職科目を「群」として統合し、その教授内容の関連性と系統性を検討するとともに、附属学校等で展開している教育実習との間で、学生の学びの往還性を実現することが主張された。これらのカリキュラム改善のアイデアは、結果として、概算要求特別教育研究経費（高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実）「先端的な教職科目体系のモデル開発—カリキュラム・フレームワーク（Cuffet）の構造的深化・高度化による学びの組織化—」に採択され、平成22年度から平成24年度の3年間のプロジェクトとして結実した。そして、先端的な教職科目体系のモデル開発プロジェクト（略称：教師力モデル開発プロジェクト）において、「卓越した教師力」の育成を支援する体系的なシステムづくりを目指していくこととなった。

本稿では、先端的な教職科目体系のモデル開発プロジェクトの概要を説明し、平成22年度の取り組みの進行状況を報告する。そして、これまでの取り組みにおける成果と課題を整理しておきたい。

2. 先端的な教職科目体系のモデル開発プロジェクトの概要

本プロジェクトでは、教職専門科目群と教育実習科目群の再編・体系化に向けて、「卓越した教師力」の育成を中心に位置づけている。そして、学生が教職の意味、役割、知識・技能、課題などを把握することを助け、より積極的に自らの学びを組織化し、教育実践力の獲得を支援する体系的なシステムづくりをめざし

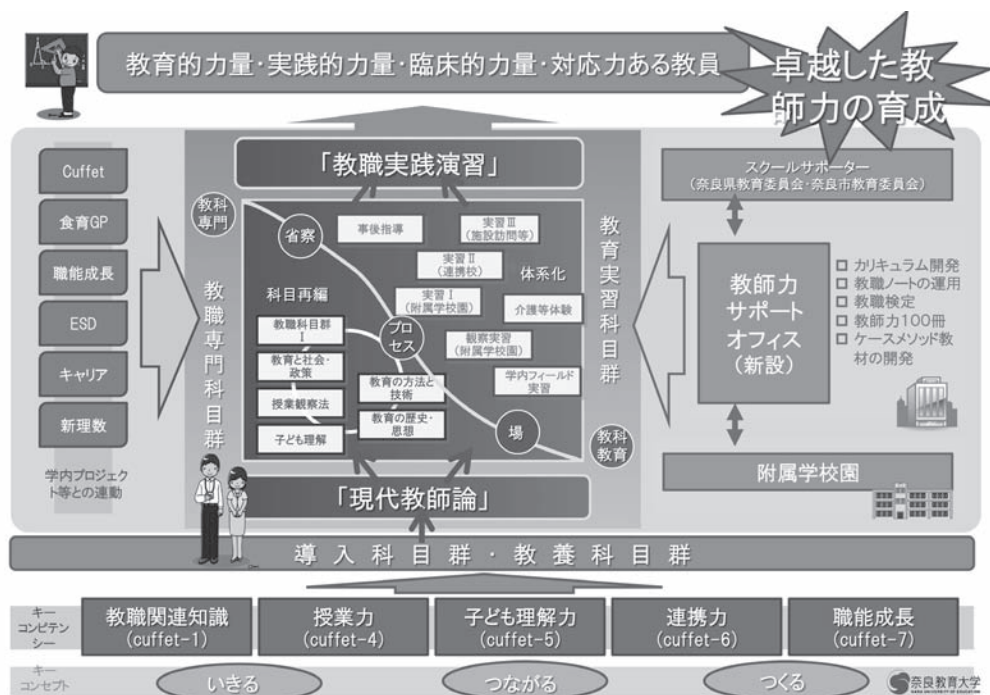


図1 先端的な教職科目体系のモデル開発プロジェクトのポンチ絵

ている。図1は、本プロジェクトの全体像を示したものである。

具体的な成果目標としては、①教職専門科目の体系化、②教育実習科目の整備、③学生の「教師力」の涵養があげられる。これらの目標を達成するために、四つの柱をもとに取り組みを進めている。以下の図に示した、深化<ふかめる>、基準設定<めざす>、教職科目群体系化<つなぐ>、まなびネット<ささえる>の四つである。図2に示した通りである。これらの取り組みの遂行と、教師力サポートオフィスの設置を通して、教育学部、教育実践総合センター、附属学校園との一体的連携のもとで、先端的、汎用性のある教員養成モデルを提案することをめざしている。



図2 四つの取り組み

それぞれの取り組みについて紹介していくことにしよう。まず、深化<ふかめる>では、三つのキーコンセプト（いきる、つながる、つくる）、五つのキーコンピテンシー（学校教育の課題把握、授業力、児童・生徒理解と教育実践への具体化、学校と地域社会との連携、職能成長）²⁾の中身を明らかにするとともに、これらを育成する過程や方法を探ることが、まず取り組みの一つとしてあげられる。その中で、場・プロセス・省察の軸をもとに卓越した教師力についてルーブリックを作成する。そして、基礎となる枠組み、観点、評価規準などを明確にし、ケースメソッド（鍵の場面）教材を作成することをめざす。その際、Cuffetをふまえつつ、卓越した教師力についての評価基準を明らかにする。

次に、基準設定<めざす>では、「卓越した教師力」とは何か、学生がめざす教師像を明らかにするために、下記の三つの事項に取り組む。

①「教師力100冊」（卓越した教師力育成のための100冊）の選定、紹介

学生自身が、4年間の学びの目標、内容、方法を明確に意識することにつながるよう、文献やDVDを選定し、紹介する。そこから、学生自身が自らのめざす教師像を具体的にイメージすることにつながっていくことを期待している。

②「教職検定」（仮称）の実施

到達基準の明確化と自己省察を促す仕組みとして準備する。4週間実習前に実施することを想定している。

③「教職ノート」の開発

日々の学習の履歴として作成し、振り返りの資料として利用する。

そして、教職科目群体系化<つなぐ>においては、教員養成に係る履修科目、ここでは、教職専門科目、教育実習科目を中心とした授業科目に、内容的、方法的な関連づけを行う。その中で、教職専門科目群と教育実習科目群との往還をはかる。

最後にまなびネット<ささえる>では、教師力サポートオフィスを拠点とし、学びの組織化をはかることをめざす。学生自身が、自らの到達状況を把握、自己評価しながら、「教師力」を身に付け、理想の教師像に近づくための支援を行う。

以上、四つの取り組みを柱とし、本プロジェクトの目標である「卓越した教師力」の育成をめざしている。

3. 平成22年度の取り組み報告

つぎに、平成22年度のこれまでの取り組みについて報告しておきたい。

3. 1. 教師力サポートオフィスの設置

まず、本プロジェクトの柱である4つの取り組みを支える拠点としての教師力サポートオフィス（以下、サポートオフィスと示す）の設置があげられる。サポートオフィスは、奈良教育大学文美棟R12-107に設置され、2010年9月に開所式を行った。

サポートオフィスに足を踏み入れると、右手に本棚がある。これは、先にあげた「教師力100冊」を配架した棚である。「教師力100冊」のコーナーには、教師力を高め、可視的なものにすることを目的として、本プロジェクトに関わっている大学教員や附属学校教員、サポートオフィスを活用している学生から推薦のあった図書やDVD・VTRもある。これらの図書およびDVD・VTRは閲覧、貸出が可能である。その奥に、テーブルとイスを置き、学生主体の活動を行う際に活用できるようにしている。

これまででは、4年生の学生スタッフが中心となって、

教員採用試験に向けて模擬授業のリフレクションを行ったり、ディスカッションの振り返りを行ったりしてきた。現在、4月から教師として子どもたちの前に立つ4回生向け（ただし、下回生もオブザーバーとして参加することが可能）の企画を、学生スタッフが計画し、自主勉強会として実施されている。サポートオフィスは、備品の提供等、勉強会を支援している。

このほか、サポートオフィスでは、様々な企画についても検討している。平成22年度については、本学の大学祭期間中に企画を実施した。それは、「教師っていいなあ」というテーマでの教育実践に関わるビデオ鑑賞及びディスカッションと、「先輩教師に学ぶ」というテーマでの講演と座談会である。講演は、小学校で活躍しておられる先生に、日々の実践で大切にしていること、教師となる学生に伝えたいことを中心に話していただいた。また、座談会では、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、それぞれの現場で活躍されている先生方をお招きし、参加者を2つのグループに分けて行った。参加した学生は、「自分自身がアクションを起こし、日々学んでいくことの大切さを感じた。」「現場の話が新鮮でとても興味深かった。『叱る』『ほめる』を大切にしていきたい。」と感想を述べていた。

このサポートオフィスを学生に周知するため、リーフレットの作成・配布、ホームページの作成、サポートオフィススタッフによるアナウンス等を行っている。

3. 2. 教師カテゴリーの検討

Cuffetに示された資質能力基準のそれぞれについて、「育成中」「標準」「卓越」という三段階で、ルーブリックを検討している。現在、原案を作成し、議論を進めているところである。

3. 3. 学生向けの「めあて」の提示

学生自身が自らのめざす教師像を明確にし、Cuffetの内容を具体的に「めあて」として学生自身が受けとめることができるよう、下記の三つの事項に取り組んでいる。

まず、学生への具体的なめあてを示す媒体としての「教職ノート」の開発である。現在、試行版を作成し、数名の学生にモニターとして活用してもらっていると

表1 「教職ノート」(試行版) 目次

1. 教師力って?	9. 教職専門科目群用ノート
2. 教職ノートの使い方	10. 振り返りシート
3. 4年間のカリキュラム	11. 異化体験シート
4. 教師力チェックリスト	12. 「教師力100冊」ブックトークシート
5. 現代教師論	13. ベスト指導案用ポケット
6. 実習について	14. 教職検定合格証
7. 教職実践演習について	15. 教師力認定証
8. 教師になるあなたへ	16. 資料用ポケット

ところである。「教職ノート」(試行版)では、表1の目次に示したような項目が含まれている。

スクール・サポートやボランティア等で培った体験も振り返りの資料として蓄積する項目(異化体験シート)も設けている。振り返りシートは、日々の授業を振り返るためのシートである。この「教職ノート」が、学生にとって振り返りの資料となり、教職専門科目、教育実習、その他の経験をつなげていく手助けとなればと考えている。

次に、「教師力100冊」の選定が挙げられる。「教師力100冊」は、先に述べたように、教師力を高め、学生自らがめざす教師像、教師力を可視化することを目的として選定している図書やDVD・VTRを指す。貸出可能であり、教職ノートには、「教師力100冊」のブックトークのページも設けている。今後、学生同士が本を通してつながっていき、ネットワークができればと願っている。

最後に、「教職検定」(仮称)の開発・検討である。4週間実習前に、学生に身に付けておいてもらいたい基本的な知識を確認するために行う予定であり、現在開発中である。

これらの取り組みを通して、大学として学生に身につけてほしいと考えている力、学生自身が教師に必要なだと考える力を具体的な「めあて」としてとらえることができるようにと考えている。

3. 4. 教育実習スタートアップの実施

「教育実習スタートアップ」とは、教育実習生の一日の流れを知り、教職への意識付けを行うという目的のもとで、2回生を対象に実施した観察実習である。平成21年度に学長裁量経費事業として実施したパイロット研究をふまえ、本実習中の3回生の授業を見学し、可能であれば研究授業後の検討会にも参観するという形をとった。具体的な観察実習の流れについては、表2に示した通りである。

表2 教育実習スタートアップ 概要

<附属幼稚園> 日時:2010年9月30日(木)8時から13時40分 当日のスケジュール: 8:00 実践センター会議室に集合・点呼 注意事項確認後、幼稚園へ移動 8:30-12:00 研究保育の観察 12:00-13:10 事後協議会への参観 終了後大学へ移動 13:20-13:40 事後指導(一言ずつ感想、提出物の連絡) 参加学生:幼年教育9名	
<附属小学校> 日時:2010年9月24日(金)8時から17時 当日のスケジュール: 8:00 実践センター会議室に集合・点呼	

注意事項確認後 小学校へ移動
 8:30-12:05 午前の授業等の観察
 13:00-17:00 午後の授業等の観察 事後反省会の参観
 17:00-17:30 事後指導
 参加学生：教育学3名 国語教育3名

<附属中学校>

日時：2010年9月29日（水）9:30-10:50（国語）
 10月1日（金）13:00-14:20（英語）

当日のスケジュール（29日実施分）：

9:30 附属中学校正門前に集合・点呼
 注意事項確認後、クラスへ移動

9:50-10:40 研究授業の観察

10:40-10:50 提出物の連絡

（*後日10月5日の昼休みに事後指導を実施）

参加学生：国語教育3名（国語） 教育学1名（英語）

学生に課した事後レポートの記述項目として、「3回生への質問」と「感想」を設けた。「3回生への質問」としては、実習に臨む前の準備について、実習における研究保育・研究授業の準備について、児童・生徒対応について、実習後に得られたこと、の四つに大きく分類することができる。具体的な実習のイメージがまだできていない2回生であり、実習中の準備、児童・生徒対応に対する関心が高かったと考えられる。

また、「感想」をみると、漠然としていた実習のイメージを具体的につかむことができ、見通しをもつことができた、実習生の様子に、1年後の自分を重ね合わせ、何をすべきか実習への意識を高めた学生がいた一方で、1年後に自分ができるかどうか、実習に対する不安を感じたと感想を述べる学生もいた。また、中学校へのスタートアップ実習参加者は、研究授業のみの参観であったこともあり、生徒の手が挙がらないときはどうしたらよいか、授業中発言しやすい子・しにくい子の把握、など、具体的な授業の進め方についての質問、感想がほとんどであった。

教育実習スタートアップに参加したのは、自主的に参加を希望した学生たちである。そのため、教職に対する意識は比較的高く、1日の観察実習で多くのことを学んでいたようであった。

4. おわりに

平成22年度の成果としては、まず、プロジェクトの支援および学生の学びを支える場所としての教師力サポートオフィスの設置があげられる。そして、学生向けの「めあて」の提示として、「教職ノート」の開発、「教師力100冊」の選定、「教職検定」（仮称）の準備を進めてきている。また、Cuffetを深める指標として、教職専門科目のルーブリックの検討を進めていること、教育実習科目の検討として、教育実習スタートアップの実施を行ったことが成果としてあげられる。

これらの取り組みをふまえて、今後の課題をあげてみよう。まず、教師力サポートオフィスの周知をさらに進めていくことがあげられる。リーフレットの配布、企画の実施、ホームページの開設などを通じて、学生への周知をはかってきてはいるものの、まだまだ浸透しているとはいえない。今後、学生への周知を徹底し、より多くの学生に活用してもらえるようにしていきたい。次に、教職ノートの開発については、試行版、モニター学生へのアンケートをふまえて、内容の充実、活用方法について、さらに検討していくことがあげられる。そして、教育実習スタートアップの実施については、学生の人数増への対応、大学教員の引率体制の検討、目的の明確化を今後の課題としてあげることができる。附属学校園の先生方との議論をふまえつつ、次年度に向けて検討していきたい。

以上、プロジェクトの概要と平成22年度の取り組みについて述べてきた。平成23年度以降は、今年度の取り組みをふまえ、柱となる四つの取り組みの改善と全教職専門科目等の見直しを順次進めていくことをめざしていきたい。

注

- 1) これをうけて、たとえば「教員養成学」を提起した弘前大学は、教員養成学研究開発センターを2003（平成15）年に立ち上げ、翌2004（平成16）年から本格的な活動を開始した。鳥根大学教育学部における1000時間体験学修は、2004（平成16）年から運用が開始されている。それ以外にも、愛媛大学、横浜国立大学など、それぞれの教員養成大学で、特色ある取り組みがなされてきている。
- 2) 五つのキーコンピテンシーの項目は、奈良教育大学におけるCuffettに示された資質能力基準の一部と一致する。

参考文献

- ・日本教師教育学会編『教師として生きる—教師の力量形成とその支援を考える』学文社、2002年。
- ・坂本昭「教師教育制度の改革動向—「大学における教員養成」の視点から—」『福岡大学研究部論集 A 人文科学編』9（4）、2009年10月、pp.15-24。
- ・岩田康之「教師教育・教員養成研究の課題と方法」『教員養成カリキュラム開発研究センター研究年報』8、2009年3月。